

## 否定表現の一考察

宮 地 裕

この小論は大別して二部にわけられる。一部は日本語における否定表現の性格に關する本質的な考察であり、二部はそれによつて解釋される具體的な現象の例示である。思ふに、日本語における否定は言語表現として定立しようとするところの或概念乃至は判断の排除の意圖を話手があらはすといふことを本質とする。否定判断は肯定判断に對立する一つの判断様式といふよりは、むしろ積極的排除の意圖の表現として考へられる。従つて逆に否定によつて何らかの概念や判断が明示されることはないといふことがわかるのである。これによつて、情意表現における否定の問題や、所謂二重否定の問題、又は否定的應答の問題などに對して、原理的な一つの解釋が可能なのではないかと思はれる。排除の意圖といふことがこれであり、或いは民族感情的なもの考へ方にもとづくかもしれない。いづれにせよこれは、日本語の表現論における體系的な位置づけを俟つべき一小論である。

存在は直觀によつてわれ／＼の認めるところとなるけれども、非存在は直觀によつて第一次的にわれ／＼の認めるところとはなり得ない。机の上の茶椀をとりぞいたとき、はじめてそこに「茶椀がない」といふ直觀が成立する。「ない」といふ概念は、存在についての反省を経なければ生れて來ないのであつて、「あること」と「ないこと」、「有」と「無」とを對立的に考へるといふことは、高度の思考を前提として、はじめて可能なことである。0ゼロの概念は正の整數の概念の後に生れるであらうことは、明らかである。しかも、おそらく、それは負の整數の概念に先行しうるものでもあるまい。人間の生命においても、生あつて死があるのであつて、死あつて生があるのではない。哲學的な探究が、たとへ、死において生を發見し、生とともに、生そのものうちに死の姿を見たとしても、なほ人間の素朴な直觀が、存在においてのみものの實體を認めうることを否むことは出來ない。宗教的信仰が、生の否定として死を見ながらも、なほ、死を以て「無」と見ず、そこに死以外の生命的世界を説き、時に天國や極樂を觀じ、時に復活や蘇生説法思想を生んでゐるのも、死即ち無ではなく、何らかの實體的な世界をそこに見出さうとする原始的直觀に依存することを示すものではあるまいか。一物體の占める空間には、他の物體は存在し得ないといふ排除の概念も、存在以前

に無を見てある譯ではない。そこに物がなからこそ、あらたに物がそこに存在しうるといふことは、實はこれまた反省の結果の推論であつて、原始的直観ではない。いづれにおいても、存在のうちに、非存在の概念が生れて來るのである。

言語表現としての「否定」といふことも、この存在と非存在との原始的な關係に立脚してあると思はれる。のみならず、われ／＼のもつ甚だ原始的な所有、肉體的精神的所有として、最も直接的であり、いはゞわれ／＼自身でもあるごとき「言葉」、その言葉における否定の現象を、その最も適切な例の一つとして示すことも出來るのである。すなわち、言語現象としての否定表現は、存在として定立し又は定立しようとすることばをとり除いてしまはうとする意圖のあらはれにほかならない。そしてわれ／＼の思惟のあるところには必ずことばがある以上、とくに否定表現といふ一つの論理的な言語表現にあつては、同じとり除くと言つても茶椀のごとき物體をとり除くのと異り、ことば自體がとり除かれるのでなくして、ことばの定立がとり除かれるといふこと、即ち語或いは文のあらはす概念乃至判断の除かれるといふことである、と考へられるのである。

例へば、「白」を否定し排除すれば、「非白」の概念が生れると常識的には考へられ、そして「白」と「非白」はたがひに矛盾する概念を意味することばであると言はれるが、「非白」は「白」に依存し、「白」の概念によつてのみ考へうる概念であり、何ら特定の色を指示し得ない、定めなき色である。對立的に矛盾するのでなく、依存的に矛盾してゐる。「白」は「非白」に依存しないが、「非白」は「白」に依存するのである。勿論、「白」が概念として定立するためには、白ならぬ他の色との識別がなければならぬから、その意味では「非白」がなければ「白」は定立しないが、それはやはり二次的な關係概念の發達によるものであつて「非白」は素朴な直観が一次的にとらへる色に對する名前ではあり得ないのである。論理學では、逆に矛盾とはかゝるものであるとして否定表現を持ち出してゐるけれども、否定の意味はそこにおいては何ら考へられない。その點では古典的論理學でも數學的論理學でも、私の理解する範圍では同様である。矛盾は一つの公理である。しかしながら矛盾してゐるといふことは否定の意味を解明しない。否定の側から見ると思ふに、「非白」は特定の色を指示せず、たゞ「白」の概念を排除することを意味するといふことであり、否定を説明しうるのは「排除」の概念である。「白」をどれほど否定しても黒にはならない。「決して白ではない」「全く白くない」といくら言つてみても黒を意味することはできない。たゞ、何か色に關する表現であると理解しうるのである。それは否定が「白」といふ概念を排除することを意味するのみで、特定の指示を意味し得ないからであり、常識的に、否定とは反對

の意味をあらはすと考へるのは白の否定が黒を意味すると誤る爲である。イエスベルセンが、數學的否定の意味と、言語的否定の意味とは違ふのだとして、 $+4$ と $-4$ の例を引き、數學的には $+4$ の否定は $-4$ を意味しようが、言語的には $+4$ の否定は $-4$ を意味しないと云つてゐるのも、言ひかへれば、 $+4$ の否定は「 $+4$ ではない」といふばかりであつて、特定の數を指示しないといふことを示すのである。彼が否定 (Negation) を説明するのに、まづ矛盾する語 (contradictory term 白と非白) と、反對の語 (contrary term 白と黒) との區別を説いたのも、この誤解を避ける爲であつた。そして彼は、否定判断の文は肯定の反對 (contrary) であつて矛盾 (contradictory) ではないと言つてゐるのであるが、この點に關しては、國語の否定表現における場合と同じく論ずる譯に行かないと思はれる。それは後述するところで、おのづから明らかにされるであらう。

\*

さて、國語には「不人情」とか「非常時」とかいふ接頭辭的な否定辭があるが、これらは言ふまでもなく、シナ傳來の語法であつて古來の國語にこれに當る否定辭を求めることは出来ない。この事實は注意すべき意味がある。われ／＼はこの「不」「非」などを含む漢語なしに單語として複合した否定表現を殆ど持ち合はせない。「不人情」は「人情に厚くない」といひ、「非常時」は「常態でない時」、「不美人」は「美しくないのであるが、それはすでにわれ／＼にとつて單語として感じられないのである。この事實は、言ひかへれば、國語は否定接頭辭を持たず、否定表現を單語として複合語的に包括することが出来ない本性であつたこと、それから、國語は「だ」相當の判断を否定することによつて、文末に否定表現を明示するのを通性とする、こと、であり、要するところ、否定が判断否定である傾向が強い、といふことを示すものであらうと察せられる。國語は、シナ語の語法の多くを消化し來つたけれども、この否定表現を單語として複合語的に包括し得なかつたといふ點は、殆ど全く一貫して現在に至つてゐるし將來も恐らく變らないであらう。逆に言へば、漢語の造語法によつて、漢語でこれを補つた點、多くを漢語に負ふ部分である。そして、國語古來の單語を、「不」「非」の類の接頭辭は否定し得なかつたといふことは、語の順序として國語は文末に判断をなすといふ本性によるのであり、従つてまた「情にあつくない」といふところを「無情である」と言ひ得ることは、論理的判断の表現形式として一つの大きな發展であり漢語のもたらした恩惠の一つであることは疑ふべくもない。勿論それは漢語全體の單語的特質によるのであり、單語としての漢

語の流入と事情は同じであるけれども、否定といふ判断の根柢にかゝる所がある點で、「表現」の面からは特に重視されるべきだと思ふのである。もしも「不」の類の接頭辭が、「ふたしか」「ふなれ」「ふみもち」「ぶをとこ」「ぶさま」などのやうな少數の形容動詞の語幹を構成するのに止まらず、もつと一般に體言用言を構成し、これを維持することが出来たならば、國語の否定表現に於ける單語的發達——即ちイエス・ルセンその他のいふところの語否定 (word negation) の國語に於ける發達を意味するもの——が見られたであらうか、とも思はれる。もしさうであつたなら、哲學用語の *Missen* を「不可」と譯し、*Sollen* を「不許不」と譯すやうな不自然さを冒さなくてもよかつたかもしれないが、惜しむべきことには、「ふたしか」「ふなれ」の類の否定表現は、國語のもつともふ得手とするところの表現の一つである。今、机邊の、大言海辭苑の類をとつて見ても、ちよつと二十足らずの單語を「フ(フ)」の部分に拾ひうるばかりであつて、その役割の殆どすべてを、ことごとく「非活動的」「不純」などの、所謂漢語乃至は漢語的な造語に譲つてゐるのである。思ふに、「ふ何」の語は、われ／＼に「何々でない状態」といふ概念を喚起するところの形容動詞語幹を構成する範圍までは及びうるけれども、それはいまだ或状態をのべる語であるにすぎず、「だ」相當の斷定辭をとつて述語となり、また「な」をとつて連體修飾語となること、「ふしあはせ」「ぶしつけ」の類がいづれもそれだけで或概念をあらはし得てゐること、また、「不渡手形」といふ複合語は出来ても、「ふわたる」「ふわたす」といふ動詞は出来にくいといふこと、など、一般に形容動詞の有する性格を持つのであつて、これらの語の安定せぬ動的な性質をあらはして居る。即ち固定概念として名詞の範圍にまで及び得ないのである。これはのちに、判断の否定表現について考へる際に關聯する問題である。

\*

さて、こゝに注意されねばならぬことが言ひ残されてゐる。「白」を否定すると、「非白」といふ概念が生れる、と簡単に述べたが、「非白」の概念とはそれ自體一つの概念であるか、否か、といふことである。ごく抽象的に考へれば、「非白」の概念」といふ一つの概念であるにちがひない。いかに抽象的にもせよ、「非白」は一つの概念として認められるといふ權利を主張するであらう。「丸い三角形」が一つの概念として論理的に認められないといふのとは事情が違ふのであつて、「非白」は「白」を排除した一つの新しい色に關する概念であるごとく思はれる。正にこれはある人が、人々に向つて、「あなた方は嘗て親しく、否定的事實に遭遇したことがあるか」と問うたのに對して、人々は、「ノー」

と答へざるを得なかつたといふ事實を説明する自然の理である。即ち、總ての人達、それは知識階級で哲學に關係ない人達であつたが、「その意見は『否定的命題で表現された知識は、何故かその譯は説明出來ないが、皆肯定の性質を持つてゐる』といふことに一致したのである。」(オグデン・リチャーズ共著「意味の意味」石橋譯、舊譯本、p. 808 新譯本ナシ) これは一つの限界をわれわれの論理的思考に劃することであり、從つてまた言語的否定の考察に多くの示唆を與へる事實である。この、否定しようとして否定しきれず、何か存在する肯定の性質について、ブレンターノ等は、表象の概念を導入して解決しようとしてゐると言ふことも出来る。(中島文雄教授は「意味論」「文法の原理」にこれを承述された。) すなわち、言語表象は、たとへ「ペガサス」であらうとも、表象としてわれわれの腦裏にあるごとく、否定概念もまた否定せらるべき表象としてはわれわれの腦裏にある。たゞこの表象を存在として認める時、存在の肯定判断が成立し、存在として認めないとき、存在の否定判断が成立する、だから「否定的表象そのものはない」、といふのであつて、表象は判断以前のものであるから、否定判断によつて、表象の存在乃至存在する表象の結合が否定されようとも、依然として表象は存在すると考へることになるのである。前記の人々が否定的事實に親しく出會つたと考へられないと述べてゐるのは、この表象が否定されずに存在するといふことによつて説明されうるがごとくにも思はれる。

しかしこの、表象といふ便利で曖昧な概念は、われわれの言語現象に持ち來つて説明のよりどころとするには、あまりに心理的である。空想的存在(ペガサス)、や、論理的矛盾概念(丸い三角形)の説明に、心理的手がかりを求めらる必要はあつても、それによつて必ずしもすべての言語現象の説明がつくとも思はれない。例をとつて考へてみると、ガランとした部屋に入つて何か足りない、何かがない、と感じるのは、これは論理的思考の結果による否定判断ではない。何かわからぬものの存在せぬことを感じてゐるのであつて、机がない、とか、カーテンがない、とか考へるのではなく、いはゞ經驗によるところの感情的な無への方向づけである。之に反して言語としての表現には實は必ず対象がある。何々がない、とか、何々でない、とか、否定さるべき対象が言語表現をとつて、話手の対象として定立されねばならぬ。その否定には、右の「何々がない」といふ存在を否定する表現もあるし、また「何々でない」といふ判断「だ」相當に對する否定もある。しかし、いづれにしても、存在乃至判断否定に關する以上は、單なる表象以後の問題でなければならぬ、と思はれる。前述したところの「否定は存在以後の事であり、非存在に先行せぬ」といふことは、こゝに再びかへりみられねばならぬ。ガランとした部屋に入つて、昨日まであつた机がない、とか、當然あるべき位置に机は見當らぬ、といふやうに、體驗として知覺した机にせよ、知覺したことの無い一般的概念「机」にせよ、とにかく机が定立された言語表現

としてあらはされた後にはじめてその否定表現は成立する。だから「ペガサス」や「丸い三角形」の表象の問題とは異ると言はねばならないのであつて、この否定されるべき概念をこの場合表象と呼ぶか否かは問ふ所ではない。たゞ右にしきりに存在といふ名で呼んだ事象は、言語表象と別個に考へられる概念であり、「否定的表象なし」と言はれる（前出「文法の原理」<sup>マ</sup>）事實は右の論考と少しも矛盾するところではない。たゞ私は、否定には主體の積極的意圖、排除の意圖があつてはじめて成立するのであり、單に肯定に對立して、判斷乃至承認の様式として否定がある、とは考へられない、といふことを言へば足りるのである。

\*

さて、問題は次第に語に關する否定といふことから、文に關する否定といふことに移行する。右に問題のポイントのみを考究したごとく、これについてもその主要なポイントのみを論ずる。

疑問表現において、

明日君は學校へ行く？

の、問はれてゐる事柄は「明日」であるのか、「君」であるのか、あるいはまた「學校へ」であるのか、「行く」であるのか、あるいはまた一般には疑問においても述語と稱される「行く」といふ概念と他の「明日」「君は」「學校へ」などの概念の一つ又はそれ以上の結合であるのか、いろいろに考へられる（國語國文、昭和26・9「疑問表現をめぐつて」拙稿）のと同じく、否定表現、

明日私は學校へ行かない。

における否定判斷のあらはす否定の意味は、「明日」を否定してゐるのか、「私は」を否定してゐるのか、あるいはまた「學校へ」を否定してゐるのか、「行（く）」を否定してゐるのか、あるいはまた述語「行（く）」の概念と他の語の概念との結合を否定してゐるのか問題である。多少明瞭にしようとして、

明日は、君學校へ來ますか？

といふ質問を受けて

いゝえ、來ません。

と答へた場合、それが「明日」に關する質問であることがわかつてゐるとしても、われわれはなほ、「明日」そのものを否定せずして「來る」こと自體を否定する表現を以つてその答へとするのである。われ／＼はこの場合「明日」を否定したくても「明日ハ……シナイ」、「明日ハ……デナイ」といふ形式を借りることなしに「明日」を否定することが出來ないのである。つまり、體言をして用言で受けとめさせ、その用言を否定することを常とするのであつて、否定することは、この場合結果として判斷の否定に限られるのである。

しかしながら、このやうに否定したい概念を直接に否定し得ないといふことは、われ／＼は國語によつて特定の概念を否定する意圖を表現し得ない、或はそのやうな意圖をわれ／＼は持たないといふことを意味しない。思ふに國語においては、必要があるならば、その否定辭を特定の語にかける意圖を表現することが出來る。すなはち、

明日は、私學校へ來ません。

といふ表現をとつて、今日は來たが明日は來ない、また明後日は來るかも知れないがとにかく明日は來ない、といふ意味をあらはすことが出來る。これは「は」助詞のいはゆる「特説」性によるものであつて、係助詞の性格として考へられて來た、どれこれにかゝる、といふ事實、逆に言へば述語の指定をうけるべき主語乃至副修語を、あらかじめ明示する意圖のあらはれである。話手はそれによつて、みづから判斷を明晰にし、聞手は豫期される判斷にたよつて理解を助けられる。とにかく、右の表現において否定されるべき語の特説があらはれるが、これは多くは場面 of 援助を受けるものであつて、このまゝ平板に言つてもその意圖のはつきりわからぬこともあるので、より明白にするためには、「は」の音調をあげるとか、「明日は」といふ文節を強く發音するとか、「明日は」のあとに時間を置くとかいふ手段がとられたりするのである。以心傳心的な通達のほかに、これらは意圖された表現面において、意味の力が音調の變化を求めて働く部分である。いづれにせよ、多くの可能性の中で「明日」といふ日が、「私が學校へ來る」といふ概念に包攝され、包攝といふ一種の結合關係で判斷に關與することが拒否されてゐるのであり、前述の考へ方に従へば、多くの可能性の中で「明日」といふ概念を判斷から排除しようとする意圖であるといふことが出來る。

一般に、文否定は判斷の一樣式として考へられて居り、判斷において肯定判斷と否定判斷とを對立的に區別して考へるし、それもまた充分意味のあることであるけれども、また右のごとくに、われ／＼が判斷形式によつてしか、否定を表現出來ない場合でも、その否定したい意圖は判

斷の一部分の概念に對して向けられるといふ場合もまたあることを考へねばならないであらう。「ことは常に實在に照應する」といふアリストテレスの假説に従へば、否定判斷といふ判斷が存在するといふのは、單純に言つて、一つの矛盾であり、従つて、あらゆる表象は必ず「もの」に還元出來るといふ心理學說も説かれるのであらう。されば否定判斷は、デイーモス氏の言ふごとく

X is not white. → X is not-white.

に還元され、文否定はすべて語否定におきかへられるのであり、そこにおいては更に語否定はその語の表象と矛盾する表象を指示するのであると考へられてあらう。即ち、「Xは白くない」を「Xは白くないものである」とおきかへ、「島ではない」を「島ならぬものである」とおきかへることは、文全體の意味としては變りがないし、また文判斷が「もの」といふ表象の存在に還元されてゐる點で心理的に依存することの出來る概念なのであるとされる。(前出「意味の意味」p. 388 石橋氏註、「文法の原理」p. 211の項p. 188等)けれども文中の語を否定することがむづかしい國語においても、なほその意圖の存在は明らかであつて、助詞のうち副助詞系統の發達はこれを物語るものである。否定判斷を肯定判斷におきかへてみるにもせよ、否定判斷を肯定判斷と對立的に判斷の形式と考へるにもせよ、それは心理學的な或いは論理的な立場からの見方にとらはれすぎてゐてはならないであらう。勿論、意味論の範圍に於いては心理的立場が主張しうる權威は大きいであらうし、命題の範圍、即ち言語における肯否兩判斷の範圍内に於いては、古典的論理學にせよ數學的論理學にせよ、論理學の主張しうる權威は大きい。けれども、心理的立場が、言語の具體的な場面における變容の體系に無關心である以上、また、論理學の立場が、命題以外の情意表現の論理に無關心である以上、具體的言語現象としてのこの否定の問題の解明にも、右の範圍内での發言として耳をかたむけるにとゞめねばなるまい。疑問・命令・詠嘆などのいはゆる情意表現に對する心理學的論理學的立場の危ふさ乃至は無關心は、否定の問題についてもまた感じられることではあるまいか。

\*

さて、こゝで具體的な現象について多少の例示をせねばならぬ。

國語における最も一般的な否定判斷の表現、

AはBではない。

は、



- a 『AはBである』ことはない』 のか、  
 b 「Aは、Bならぬものである」 のか、分明でないことは前にもちよつと觸れた。例へば、  
 この花は白くない。 は、

(a) 『この花は白く』といふことはない』 のか、  
 (b) 「この花は、白くない色をしてゐる」 のか、分明ではない。すなはち、「ない」といふ否定が「この花は白い」といふ判断全體を否定してゐるのであるか、あるいはまた、「白である」ことを否定して全體としては「この花は、白くない色をしてゐる」といふ肯定判断をしてゐるのか、はつきりしないのであつて、このため、國語には語否定と文否定の區別はないと言はれ、また文法上「その區別をする必要は殆んどないと云はなければならぬ」(國語學I「肯定と否定」濱田敦氏)とされることもあるのである。事實右のやうに論理的に推してゆけば、兩様の解釋がなされることは明らかである。けれども、この〔a〕〔b〕の區別がなされることもまた明らかであり、〔b〕の「白くない(色)」の表現は語否定的であると言へるのである。それ故、一方では語否定とも文否定ともはつきりしない否定の表現もあるし、それが實際上多いけれども、一方ではどの概念が否定されるのか、語否定か文否定かをはつきり示すことの出来る表現もあり、前記副助詞類の發達がこれを助長するといふことも考へるべきである。前にも觸れたが、最も簡単な形式としては、

この花は白くない。 に對して

この花は白でない。 といふ表現があつて、兩者の區別は微妙であるが、なほ、「て」が否定せられるべき判断「だ」の不完全表現

(未然形)の感じを興へる故に、後者は

「この花は白く」なり。

といふ所謂文否定の感じを得、これにくらべれば、前者「この花は白くない」は、所謂主述の(こまかく言へば提示(特説と前に言つた)語に對する述語の)關係として理解され、「ない」の形容詞性が意味的にも形式的にも明瞭な場合として考へられる。つまりこれは、

「この花は」―「白くない」

といふ語否定の感じを得るのである。國語の否定辭の形容詞性については、橋本進吉博士「助動詞の分類について」著作集(二)、濱田敦氏「形容

詞の假定法」(人文研究昭27・6)その他に説かれるごとくであつて、古代語及びその殘存形「ず」「ぬ」の場合もほゞ同様に考へられるが、形式上形容詞性の明白な「ない」が優勢を得てゐることは、意味論の立場からは興味深いことであり、「あらず」「あらぬ」「ずあり(ざり)」「を」「ない」一語で表現するといふ形式上の簡便さ、従つて名詞形容詞形容動詞を通じて用ゐるといふことのほかに、語否定であれ文否定であれ、また單純な存在否定であれ複雑な判斷否定であれ、みな「ない」で表現出來、しかも要すれば副助詞類の使用その他の方法によつて明確化を期しうるといふ利點を見逃しえないのである。

次に、「は」の特説する力と、「ない」との呼應の問題には前にすこし觸れたけれども、ここに、副助詞として必ず否定辭に呼應する「しか」について、興味をひく問題がある。

m 三ヤール半しかとれない。

n 三ヤール半だけとれる。

右の二つの文の意味的な差異について考へると、事實上「三ヤール半とれる」ことは同じなのに、mは「しかない」と表現してゐる。この事實は、否定辭を要求する係助詞「しか」は一方では「のみ」の意味を以つて「三ヤール半」を限定し、全體で「だけとれる」の意味をなしてゐる、係助詞の機能はかやうに判斷の根柢にかゝはるところにある、と説明しうるが、これは助詞の機能から論ずれば然りとしても、事の一面からの説明である。意味論上はむしろ、存在に對する否定的な見方のあらはれと見るべきであつて、「しか……ない」の呼應はその強調乃至は先後分離した心理的な否定表現として意味があると思はれる。「三ヤール半とれる」ことを「ない」といふ側から、少くとも「少い」といふ側から手がとらへてゐる表現である。nはこれに對して「ある」といふ側からとらへた表現であつて、この方には、數量限定の意圖(國語國文昭27・9「副助詞小攷」拙稿)以外にかくべつの強調の感じられない場合も充分豫想されるのは、存在を「ある」側から見る立場が、直觀的素朴的であるのに對して、「ない」側から見る立場は、二次的な主體の否定の意圖が加はるためであると思はれる。

\*

右にいろいろ述べたことも、結局は否定が主體の排除の意圖の加へられた言語表現であつて、單に判斷の一様式として肯定判斷に對立するものではない、といふにすぎない。それを確認することは困難ながら必要なことであり、それについて、否定表現は少くとも理論的には何ら指示すべき概念を明示しないといふ事を認めることは重要なことであると思はれる。これによつて情意表現に於ける否定の問題、二重否定乃至累重否定（イエスペルセンのいふ Cumulative negation）否定の返事の問題、その他に對して、一つの見方を提供出来るかと思はれる。

いま、これについて細かく述べることは小稿の目ざすところではないし紙數のゆとりもないから、概略にとゞめるが、例へば情意表現における否定の問題について考へるに、情意表現は前出「文法の原理」などの説によると、否定は判斷の一様式として肯定に對立するのであり、情意表現との關聯については觸れられてゐない。その理由は、思ふに「表象」の承認において肯定の存在判斷が成り立つのに立して、その不承認において否定判斷が成り立つと考へられるから、情意表現においても、表象の承認不承認の問題として否定は考へられても、情意表現の根本的な問題としてとりあげられる必要がないからであると思はれる。事實、たとへ、判斷と情意とを對立的に考へず、話手の言語意識と聞手のそれとの相對的關係に於いて判斷と情意とをとらへる私の考へ方に從ふとしても、ほとんど支障を來すところなく否定を受入れることが出来る。例外は、單なる歎聲「あゝ」とか「おゝ」とかの類と、否定辭が論理的な感じを與へる點、及び否定辭が單に言ひまはしの婉曲を表現するといふ點にある。例へば「あゝ」に對する否定的歎聲は存しない。絶望と怨嗟の嘆聲も同じく「あゝ」である。否定の論理性といふのはこの場合にすてに見られる譯であるが、また例へば、「マア、きれいなこと！」に對して、「マア、きれいでないこと！」といふ表現の間抜けさに感じられる。一向に「きたない」感じが出ない。即ち、情意表現にあらはれる否定辭は、おかど、違ひな感じを與へるのである。それは否定が一つの積極的不承認の意圖、排除の意圖の表現であり、言語主體が表現をひとたび客觀視してはじめて成立する事實によるものであつて、しかもそれが特定の概念をうち出さなないためであると考へられる。といふのは、同じ情意表現と言つても、多くの客觀的な論理の表現においては、否定は常に肯定に對立して成り立つのである。

（應 答） 「はい」——「いゝえ」

（推 量） 「降るだらう」——「降らぬだらう」

(念押し) 「明日来るね」——「明日来ないね」

(疑問) 「歸つて來ますか？」——「歸つて來ませんか？」

などであつて、この事實は命令表現といふ最も相手の主體性に關する情意表現においてさへ成り立つてゐる。

(命令) 「行け」——「行くな」

ところが、さきに見たごとく、詠嘆的な表現の場合には、否定が論理性の介入として妙に感じられる。それ故、國語における主觀的情意表現の否定は疑問表現乃至反語表現を借りるものに限られる。即ち、感情的な輕蔑の表現や、丁寧な婉曲の表現においてとられる否定表現は明らかに單なる論理的否定でなく、いはゞ心理的な否定として感じられ、言語表現としては、多くイデオム風に固まつてゐるのである。「そんなことして駄目ぢやないか」、「お月見につれて下さらない？」など挙げれば限りなく、しかもすべて疑問乃至は表面上の疑問形式である點、肯否の中間的なあいまいな表現を目ざしてゐることがわかる。否定が排除の意圖の表現であつて、何ものをも指示しないといふことに頼るからであり、それによつて疑問の判定要求を婉曲にあらはしうるからである。疑問表現を肯定と否定との中間に置くイエスペルセンの考へ方は、この點に證據を持つてゐるのである。

つぎに、二重否定の問題について略述する。二重否定の例は、

えゝ、もしこれで異狀がなければデスネ、普通にしてゐていゝんですがネ (遠藤嘉基教授昭27・9某日)

*I can't do nothing without my staff* (Hardy イェスペルセン所引)

その他西歐の言語學では早くから Negation の一問題としてとりあげられて居る現象であつて、否定が二つ重なつてゐるのに肯定を意味せず、否定の意味をあらはすのである。勿論現代、標準的な規範語法としては、何所の國でも認めはしないし、論理化の歩みの早い昨今では、話しこばにおいてさへ、ますますその影をひそめつゝあることは言ふまでもない。しかしなほ、不用意の際の發言や、方言圏でのイデオム風な表現としては、時折見られるもののやうである。右の「なければ」の類のみならず、

ないもせん金を無理に出して (伊予松山方言といふ。國語學 I p. 55)

君のいまの話は不必要以上に多すぎるヨ。(昭27・8・10ラヂオ寄席、萬歳「言葉・人・服装」)

などを拾ふことができる。これら二重否定の現象も、よく言はれるごとく、否定しよう否定しようとする意圖が、おのづから重なつてあらはれるといふことは勿論言へるであらうが、それも根柢において、否定するといふことが言語的には排除の意圖のあらはれでありその限りでは積極的不承認であるとはいつても、なほ、特定の概念を指示し得ないといふ、いはゞ不安定なせり、がさせるわざであらうと思はれる。否定の強調、つみかさね、といふばかりでなくて、やはり、つみかさねられる理由があると思はれる。

否定の返事といふのは「いゝえ」のことであるが、「いゝえ」がたとへ明白な拒否乃至否認をあらはすとしても、なほ右の否定の本性と考へたところとは矛盾しない。古代中世國語のイサもイヤも「必ずしもはつきりした否定でなく、相手の話を軽くうけとめるといつた性質が強く、恐らくそれが本來のものではないかと思はれる」(國語國文昭27・9池上禎造教授「はい」と「いゝえ」)のも自然の理であつて、語氣や態度に助けられることなしには現代の「いゝえ」でさへ明白な拒否をあらはさないことが、屢々あるのであり、單なる「受けことば」の場合もあるほど(前出「疑問表現をめぐつて」拙稿)あるが、これは恐らく國語の否定の返事の本性であり、否定の本質に根ざすのであらう。インド人の否定的單語は彼らにとつて、日本人やシナ人ほど消極的な意味しか持たないのではなく、積極的な道德律を示しさへするといふこと、例へば努力策勵の代りに「不放逸」といひ、怨みに對して「不怨」と言ふ事實(中村元博士「東洋人の思惟方法」第一部p.8以下數頁)は、勿論インド人が否定的表現を好むといふ性質によるとも言へるが、彼らにとつてはこの場合、ことばを超え論理を超えた感情的信仰的道德律の中に直入し得たといふことを逆に示すのであつて、言語的否定の本性を超えてあると私には思はれるのである。しからざれば、「もちろん」を現代日本人が「論ずる勿れ」「論ずるに及ばず」などと感ずるに居ない程度に、あるいは「ねばならぬ」「にちがひない」以上に熟合した單語として、彼らはそれらの否定的な語彙を直接的に感じてゐたのであらう。どちらかと言へば私には前者のごとく感じられるが、否定辭を持つ單語に積極的な意味を感じるのはインド人にあつては宗教的道德律に限らないのであるとすれば——勝敗といふ場合にインド人は「勝と不勝」といひ、多くといふことを「非一」といひあらはすことが多い(同書)とすれば——後者として考へられもしよう。あるいはそれさへもが絶對者の否定的把握といふ、底流する民族感情的なものによるのであるかもしれない。西洋のイエスとノーとの對立的論理判斷の發達(それは十數世紀以來のことにもせよ、萌芽は古くに見られるらしい)に比べ、それは甚だ對照的であり、日本語のハイとイ、エの感じ方をその中間に置くことが出来るかも知れない。

\*

以上、要するところ、否定は言語表現として、定立しようとする表現に對する排除の意圖を、話手があらはすものであつて、否定判断として見ても、それは肯定判断に對立しうる一つの判断の様式ではなく、積極的な排除の意圖があらはされたものであると思ふ、といふこと、名詞として否定辭を擔ふ單語は、國語本來のものではなくて、漢語に負ふ故、國語の否定は文否定の傾向にあることは否めないけれども、語否定の意圖がないわけではなく、またその表現意圖のあらはれも多少は見られるといふこと、國語の否定は否定された概念によつて特定の概念を指示するといふことが理論的にはないから、否定の排除するといふ意圖とともに推論すれば、情意表現における否定の問題、二重否定の問題、否定の返事の問題などに對して、原理的な解釋が可能ではあるまいか、といふこと、これらは、あるいは何らかの民族感情的なもの考へ方につらなるかもしれないし、それらの相互の關聯も考へられるかもしれないが、それは臆斷であつて今後の考察に俟たねばならぬといふこと、を述べたのである。いづれも「表現」に關する考察の一斑として、判断表現、情意表現にかゝはりつゝ、表現方法乃至は表現の內的外的條件などを綜合した、表現論の體系の中での位置づけを俟つものである。概略に失してしかも蕪雜の感をまぬがれなかつた小論である。記して御教示を願ふ。

以 上